

ブータンの文化的アイデンティティについて

栗田 靖之
国立民族学博物館

ブータンの文化は、主流としてはチベット文化の流れを受け継いでいる。しかしチベット文化を基層としながら、それに東ヒマラヤ帯の文化をとり入れ、独自の文化をつくり出してきた。今日のブータンは、自らの文化的アイデンティティを確立しようとしている。例えば、政府の官僚として任じられた場合には、ブータンの民族衣装を着なければならないとしたこと、ゾンカを用いて公文書を書こうとする運動をはじめたことなどは、開国して20年たったブータンを、ひとつの文化的ユニットとして他の文化圏と峻別しようとする文化的アイデンティティ確立の動きと解釈される。ここでは、文化を構成する具体的な要素を取り出し、ブータンの文化的アイデンティティを検討する。

1 ブータンの民族構成

ブータンに居住する民族については、本格的な学術調査が行われていないこともあって、その起源に関して、現在のところ不明な点が多い。

一般には、東ブータンに住んでいる人々はシャーチョップと呼ばれている。この人々は、モンゴロイド系であるが、その起源については明らかではない。一方、西ブータンには、ガロップと呼ばれる人々が住んでいる。この人々は、9世紀初めに、チベットから移住してきたといわれている。

これら、シャーチョップとガロップがいわゆるブータン人を形成しているのにたいして、南部国境地帯には、ネパール系の人々がいる。インド・アッサム州に住むネパール人は、イギリスが、アッサムの茶園労働者として、ネパールから連れてきた人々であるが、ブータンのネパール系住民は、その起源が異なるようである(注1)。ブータンのネパール人の起源は、1904年のヤングハズバンドのチベット遠征のときにさかのぼる。このときネパールの西部地域からネパール人がブータンに連れてこられ、このヤングハズバンドの使節団がチベットへ抜けるための道路工事に従事した。そのときに、当時のトンサ・ベンロップであったウ

ゲン・ウォンチュックがこのヤングハズバンドの使節団をチベットのラサに案内し、その功績が認められて、ウォンチュック家がブータンの国王となるわけである。ヤングハズバンドは、彼の使節団としての任務を終了した後、それらのネパール人を母国に帰らせることなく、その処遇をトンサ・ベンロップに引き継いだ。そしてその子孫が、ブータンに定住したものである。

2 ブータンの言語

ブータンの言語は、谷がかわるごとに変るといわれている。現在ブータンの公用語となっているゾンカは、城塞を意味する「ゾン」と、舌または言語を意味する「カ」という言葉からなりたっており、ゾンカはさしずめ、「城の中で話される言葉」といった意味になるであろう。それゆえゾンカは、中央政府から派遣された役人の言葉という性格が、現在も強い。

たしかに現在においては、ゾンカをブータンの共通語としようという努力がつけられているが、現在も各地方においては、方言がさかんであり、ゾンカの共通語としての位置は、未だ十分に確立しているとは言えないのである。それに加え

て、ブータンにおいては、小学校、中学校、高等学校、そして東ブータンのカンルーンにある唯一の大学においても、国語としてのゾンカの教育は行われているが、個々の教科は英語で教育が行われている。

この学校教育において英語を用いるという方針は、先代の第3代ジグミ・ドルジ・ウォンチュック国王の英断によって行われた。その理由は、将来ブータンの青年が、世界で活躍するとき、言葉において不自由をしないようにという配慮からなされたものであった。

それとともに、学校教育を開始したとき、教師の人材をインドに求めた。その結果、インド各地からインド人教師がブータンに赴任し、教育に携わった。事実、ブータンから数千キロメートル離れたケーララ州から赴任した小学校教師もいた。

このような経緯もあって、ブータンでは教育の場においては、英語が大きな役割を占めることとなった。しかし近年にいたり、学校教育を、英語で行うことの意味が問い直されることとなったのである。

その第一の原因は、学校で教育された知識が、その子供たちが、卒業して帰る村の生活の場に、有効に還元されていないということである。子供たちが、卒業して帰る農村では、今日でもその地方の方言がはなされており、学校において英語で教育された子供たちも、やがては英語を話す機会をなくし、英語を忘れるのである。

それとともに、彼らは外国語で知識を教育されるので、それが現実の生活とどのように結びついているのかが、不明なのである。たとえば、農業には、fertilizerが必要であり、そのfertilizerの中には、ureaというものがあり、それが作物の根に効くという知識を学校で獲得したとする。そして、子供たちが、農村に帰ってそのことを親に話したとしても、親には、fertilizerがどのようなものであり、ureaが何なのかは、想像もつかないのである。もしこれを、それぞれの地方の「肥料」や「尿素」にあたる言葉に翻訳して教えていたとするならば、親の世代においても、それが肥やしの中に存在するものであるということとは、容易に想像できるのである。

このように、最近では基礎的知識を外国語で教

えることは、問題が多いことに気がつき始めた。そのために、初等教育は、ゾンカで行うべきだという主張が行われている。学校教育だけでなく、今まで、もっぱら英語で書かれていた公文書を、ゾンカで記述せよという政府からの通達も行われている。

このように、ブータンにおける言語は、今日でも、大きな問題として、存在しているのである。

3 ブータンの宗教

ブータン人の中で信仰されている宗教は、チベット(大乘)仏教である。これは、カギユ派の中のドルック派であり、この宗派が、ブータン全域において、主流をなす宗派であることは、疑いの余地がない。

確かに、仏教伝来以前のボン教の名残が、今日でもゾンで演じられる仮面舞踏の中に残っているといわれているし、東の端の町タシガンには、土着の信仰が今日にまでその姿をとどめている。しかし、ブータン全体において、ドルック派のもつ影響力は、揺るがないものである。

ブータンのチベット仏教について注意すべきことは、このセクトが、中国チベット自治区において大きな力をもつゲルー派とは、ことなつた教派であるということである。すなわち、ブータンにおいては、ダライ・ラマを首長とするゲルー派とは、一線を画している。ブータンにおいては、その宗教権威の第一人者は、ダライ・ラマではなくジェ・ケンポと呼ばれる大僧正にあって、俗界を国王が支配するのにならして、精神界は、ジェ・ケンポが支配すると考えられている。

またブータンにおける他の宗教の活動を見るとき、ブータンは未だかつてキリスト教が布教されたことがないということは、興味深いことである。かつて南の国境地帯にあるブンツォリンにおいて、カトリック系の教団が技術学校を開校していたことがあったが、このときも、布教活動は禁じられていた。

ブータンの一般的な庶民にとって、キリスト教的倫理観が、一度も教育されたことがないという意味において、世界においてまれな地帯であるということができよう。

キリスト教的倫理観がもたらされたことがない

ということは、結婚の形態においてバラエティが多いということである。たとえば、一夫多妻や、またその逆に多夫一妻の婚姻形態が見られる。そして一夫多妻の場合、妻同士が姉妹であること、多夫一妻の場合は、夫同士が兄弟であることが多いが、これらはチベット文化の影響である。また結婚式や披露宴を行うことは、まれである。

ブータン人の良家の子女には、インドのダーズリンにおいて教育を受けるものもいる。ダーズリンには、キリスト教系のミッション・スクールがあり、そこで教育された学生は、キリスト教については、多少の知識をもっている。しかし、これらはごく少数の人々であり、基本的にはブータン人は、キリスト教にたいして、ほとんど知識がない。

4 ブータンの服装

宗教以外にも、ブータン全域において見られる共通性としては、服装をあげることができるであろう。総じて西のハ県から東のタシガン県にいたるまで、人々の服装は、基本的には、女性はキラと呼ばれる一枚布を身に巻き付け、コマと呼ばれる留め金で、それを肩のところで止めている。

いっぽう男性は、ゴと呼ばれる民族衣装を身につけている。これは、日本の丹前に似た構造をもっており、これをたくし上げて、懐を大きく膨らませた着かたをする。

このキラとゴは、ブータンの全域で見られるものであるが、数少ない例外は、ラヤ村の女性の服装と、ブータンの東の端に住むブロックパと呼ばれる人々の服装である。

ラヤ村は、今回われわれマサコン登山隊が通過した国境守備隊の駐屯地であるタクチマカンから、およそ1時間ほど北のところにある。ここでは男性は他のブータン人と同じように、ゴを着ているが、女性はキラのような一枚布の服装ではなく、ヤクの毛から紡いだ黒い厚手の生地を仕立てたスカートと、短い丈のチョッキを着ている。また、頭には、竹で編んだ帽子をかぶり、その帽子の中には、バターを入れている。このバターは体温で溶け出し、それが髪の毛を保護する整髪剤の働きを考えると考えられている。

また東ブータンのブロックパの男たちの服装

は、なめし処理をされていない毛皮の貫頭衣を着ており、男女とも頭には4本のタレの付いたベレー帽のような帽子をかぶっている。

ブータンの東、インドのアルナーチャル・プラデーシュの西カメン・デストリクトには、モンパといわれる人々が住んでいる。この人々が、ブータンの東のメラサクテン谷に住むブロックパといわれる人々と、どのような関係にあるかは、大いに興味のある問題であった。かつてアルナーチャル・プラデーシュを調査し、モンパの写真を発表したエルウィンによれば、モンパもまたブロックパと同じ4本のタレの付いたベレー帽をかぶっている [Elwin 1959:192]。モンパとブロックパが、どのような関係にあるかは、疑問であったが、セン [Sen 1986:26] によると、アルナーチャル・プラデーシュのモンパは、ブータンの北方を通して、アルナーチャル・プラデーシュに入ったと記述している。このセンの記述は、確たる証拠が示されているわけではないが、可能性のあるひとつの考え方であろう。もしセンのこの考え方をとると、ブータンのブロックパは、アルナーチャル・プラデーシュのモンパの人々が、ブータンを通過したときに取り残された人々と考えられるのである。

ここで注意しなければならないのは、ブータンの女性のキラは、明らかに、チベットの女性の服装とは異なっていることである。チベットの女性の服装は、胸当ての付いたいわゆるジャンパースカート風の形をしているが、ブータンの女性のキラは、一枚布である。この一枚布の服装ということに関しては、われわれは、すぐにインドのサリーを思い出すが、中尾佐助氏は、サリーとキラは、まったく違う原理の服装であると指摘している。

サリーは、90センチから1メートルの幅の布を腰に巻き、その残った部分を肩に掛けるものである。それにたいして、キラは、肩までの広幅の生地を肩の高さで巻き、肩の部分でコマという留め金でとめる。この形式は、ローマのキトンといわれるものと同じである。

この服装の形式は、広くアルナーチャル・プラデーシュ一帯のトライブの女性の服装に共通する部分がある。このことから、中尾氏は、ブータンの女性の服装が、東ヒマラヤの文化的要素をもったものであると指摘している (注2)。

5 ブータンにおけるソバ

ブータンの主食は米である。ブータン人は、好んで赤米を食べる。しかし、2,700メートル以上の高度においては、もはや米の栽培は不可能となる。このような高地では、もっぱら、ソバを主食としている。おもにソバを主食としているのは、ハ県とトンサ県である。ソバは、通常500メートルぐらいから、3,000メートル程度まで、栽培されている。低地においては、9月ごろから11月ごろまでの秋栽培と、2月ごろから6月ごろまでの春栽培とで年2回栽培されている。ソバには、2種類がある。一種類は、本種ソバで、これは、日本で食されているのと同じである。それにたいして、もう一種は、ダツタンソバといわれる種類である。このダツタンソバは、味に特徴がある。それは、たいへんニガ味があることである。いま本種ソバをアマソバと呼び、ニガ味のあるものをダツタンソバと呼ぶことにする。畑においては、アマソバとダツタンソバは、区別することができない。ソバの花には、白い花とピンク色の花があり、ブータンでは、白い花がアマソバで、ピンクの花がダツタンソバであると聞いたが、農業の専門家、竹井恵美子さん（大阪学院短期大学）に聞くと、花によっては、この区別はできないという。しかし収穫された実では、アマソバとダツタンソバは、区別することができる。それは、実をよく観察したとき、実が角ばっているのがアマソバで、実に丸みがあるのが、ダツタンソバである。この2種類のソバは、ブータンにおいては、区別することなく混栽されている。

ソバは、その収穫期になると、刈り取られるが、その場合、刈り取りは、根刈りである。そののち脱穀をされるが、その場合、ちょうど人の胸の高さに渡された一本の木に人がつかまり、その足元に広げたシートの上で、刈り入れたソバを、足でもんで脱穀する。

脱穀されたソバは、つぎに製粉される。谷川の水を利用した水車の力で、石臼で製粉する。日本のソバの製粉現場では、かぐわしいソバの香りがするものであるが、ブータンのソバの製粉現場では、このソバの香りがしないのである。

つぎにこのソバを、練って麺にする。大きな木をくり貫いた容器の中に、ソバ粉をいれる。小麦

などのつなぎは、一切加えない。少量の水を、徐々に加えながら、ソバ粉を練っていく。このときソバ粉は、薄い緑色をしている。

その練り上げたソバを、ブタまたはブタシンと呼ばれる押し出し式の製麺器にかける。このブタには、てこが上部に付いている。本体の中央部のシリンダーの底には穴があり、そのシリンダー部分にてこ結合したピストン部分があって、そのピストン部分が、麺を押し出すのである。この押し出された麺も、ブタと呼ばれている。このように押し出し機により製麺するのは、ソバ粉だけで練られたドウには、延展性がないからである。

押し出された麺は、手早くさっと、ゆでられる。そのゆで上がった麺に、バターを熱したものと、ときには卵をスクランブル・エッグ風に油でいためたものをかける。トンサ県では、熱したマスタード油をかけ、そこにトウガラシ、刻んだアサツキをかけて食べていた。

このほかに、ソバには、いろいろな食べ方がある。ソバを練るところまでは同じであるが、それを薄くのばし、パンケーキ風に焼いて食べることがある。これは、クレという食べ物である。

またハ県では、大晦日の晩に限って、ソバ粉で、ブータン人がモモと呼んでいる餃子のようなものをつくって食べることがある〔西岡ら1978:70-71〕。これは、ヘンテと呼ばれている。

そのほかには、トンサ県では、ソバ粉をお湯で練って手のひらの上に小さな器状のものをつくる。その中に、バターとトウガラシを入れて、そのソバでできた器の縁を少しづつ崩しながら、中のバターとなじませながら食べることもある。

ソバは、最近あまり好まれる食物とは言えないようである。ハ県では、以前はソバを常食していたが、今では、ブタの餌にしか使わないという。

ダツタンソバのニガ味は、皮のところにある。だから、ソバの皮を丹念に取り除くと、ダツタンソバのニガ味は、消えるといわれている。

このように、ソバ粉からつくる伝統的なブタとともに、小麦粉からつくるソバもある。これは、トゥクバといわれるものであり、このソバの起源は、チベットからもたらされたものようである。トゥクバは、都会的な食べ物であり、町の食堂で供されている。

6 ブータンのミタン牛飼育

これとともに、ブータンが、東ヒマラヤ文化圏の大きな影響を受けていると思われるものに、ミタン牛の飼育がある。この牛は、東南アジアから、アルナーチャル・プラデーシュに至るまで広く分布している。普通牛を林間放牧したときには、ヒルの害で貧血症状を示し、やがては衰弱してしまう。しかしミタン牛は、ヒルによる被害をうけず、林間放牧に強いのである。アルナーチャル・プラデーシュでのミタン牛の飼育の状況を見ると、なぜこの牛が飼育されているのかが、判然としないことがある。アルナーチャル・プラデーシュでは、積極的に飼育されているわけではなく、林間に放牧されていて、ときどき飼い主が、塩をやっている程度であるという。ミタン牛の肉がとくに好まれているわけではないが、儀礼の場面においてはミタン牛を屠殺して儀礼に用いている。

ブータンにおいては、ミタン牛は、乳の中に脂肪分が多く、このミタン牛を普通牛に掛け合わせると、乳をよく出し、なおかつ病気に強い牛ができると信じられている。ブータンでは、ミタン牛をもつことは、一つの富の象徴である。

このミタン牛をブータンの東アルナーチャル・プラデーシュに住むブロックパから得ているのである。しかしこのブロックパは、ブータンの人々からは、獐猛であるといわれている。そのために、ブータン人は、このブロックパとの間で、かつては特殊な交易を行っていた。これは、ブータン人がミタン牛を欲しくなったとき、ブロックパとの境界にある山の上に上がり、ブロックパが欲しがるようなものをそこに置き、のろしをあげて山を下りる。やがてその場所にブロックパが上がってきて、ブータン人が残していったものが、自分たちの気に入るものであるならば、そこにミタン牛を連れてきて、そこにつなぎ、山を下りる。やがてブータン人がやってきて、そこにつながれているミタン牛が気に入れば、そのミタン牛を連れて帰る。ふたたびそこにブロックパがやってきて、ブータン人が残していった品物を持ち帰るのである。

この交易は、交易の当事者が、まったく顔を合わさず、物品だけが交換されることから、沈黙交易と呼ばれている。

現在においては、ブータン人は、アカ族の村へいきミタン牛を直接購入しているという。このアカ族は、ミジ族、コワ族と同じ民族の系譜にあるとみなされている。

シモンズら [Simoons and Simoons 1968:189] によれば、アルナーチャル・プラデーシュの東部にいるダフラ族は、ラマイ (ミジ) 族と、ミタン牛1頭にたいして、普通牛2から3頭を交換する。ラマイ族は、モンパ族とミタン牛1頭にたいして、普通牛5から6頭を交換する。そして、モンパ族はブータン人とミタン牛の取引を行うのである。このように、ブータンの東部においては、ミタン牛をめぐる、今日でも興味深い取引が行われているのである。

7 ブータンの文化的影響

このように、ブータンにおける文化的要素を考察すると、ブータンは、チベットからの大きな文化的影響を受けているといわなければならないだろう。その文化的影響の最大のものは、言語であり、チベット仏教であり、それとともに、ブータンの基層の生業の一つとしての、ヤク飼育である。ここでは、詳しく述べなかったが、ブータンにおけるバターやチーズの製法は、チベットで行われている方法と、全く同じものである。これらの文化要素は、まぎれもなくチベットからもたらされたものである。

ここで述べておかなければならないことは、ブータンにたいする南からの影響というものが、非常に少ないということである。すなわち、インドのアッサム地方からもたらされたであろう文化的影響には、どのようなものがあるだろうか。中尾佐助氏は、唯一インドからもたらされたであろうものは、ラックカイガラムシによるエンジ色の染色であるという [中尾、西岡 1984:108-110]。

このエンジ色は、ブータンでは、僧侶の衣の色に見ることができる。この色は、ラックカイガラムシの分泌物を用いて染色したものである。薄く染めた場合には、黄色に近い色に、濃く染めたときには、エンジ色に染め上がる。この染色が、インドからの影響であると、中尾氏はのべている。

それにいま一つ付け加えるならば、ドマがある。ドマは、インドでは、パーンと呼ばれているのも

であり、キンマの葉にピンロウジュの実をのせ、それに石灰を加えて口の中にかむ嗜好品である。これは、まぎれもなくインドからの影響であろう。

このように、ブータンの位置する東ヒマラヤにおいて、インドからの影響が少なかったのは、ブータンとインドとの間に横たわるタライの樹海をあげなければならない。この熱帯降雨林は、かつてはネパールからブータンまでの間を幅広くおおっていたが、最近、ネパールの南においては、大規模な伐採が進行し、ほとんどその姿をなくした。

しかし、今日でも、ブータンの南では、この熱帯降雨林は、よく保存されている。一つ考えられることは、この熱帯降雨林が、マラリアの巣窟であり、そのために、インド文明の北進を妨げたとする考え方である。しかし、マラリアが人々の進出の阻害要件になったのは、むしろチベット系の人々にたいしてであり、マラリアに耐性をもつアッサムの人々にたいしては、阻害要因にはならなかったのではないかと考えられる。

ブータンの文化は、主流としてはチベット文化の流れを受け継いでいる。しかしチベット文化を基層としながら、それに東ヒマラヤ帯の文化をとり入れ、独自の文化をつくり出そうとしている。

今日のブータンは、自らの文化的アイデンティティを確立しようとしている。具体的には、ブー

タン国内に居住するネパール人が、政府の官僚として任じられた場合には、男性は、ブータンの民族衣装であるゴを着なければならないとしたこと、それとともに、先に述べたように、ゾンカを用いて公文書を書こうとする運動をはじめたこと。これらは、開国して20年たったブータンを、ひとつの文化的ユニットとして他の文化圏と峻別しようとする文化的アイデンティティ確立の動きと解釈されるのである。

注

- 1) ブータンのネパール人に関しては、今枝由郎氏からの情報である。
- 2) ブータンの女性の衣装に関しては、1985年7月におこなわれた「アッサム地域の民族誌研究会」において、中尾佐助氏が、発表された。

参考文献

- Elwin, V. (1959) *The Art of the North-East Frontier of India. North-East Agency, Shillong.*
- 中尾佐助・西岡京治 (1984) *ブータンの花*. 朝日新聞社
- 西岡京治・西岡里子 (1978) *神秘の王国*. 学習研究社
- Sen, Sapia. (1986) *Arunachal Pradesh and the Tribes: Select Bibliography*. Delhi: Gian Publishing House.
- Simoons, Frederick J., Simoons, Elizabeth S. (1968) *A Ceremonial Ox of India. The Mithan in Nature, Culture, and Hisrory*. The University of Wisconsin Press: Madison, Milwaukee and London.